

---

幼児教育・保育をめぐる国際的動向 ～保育政策がいかにかに社会を支えるか～

講師：鈴木 正敏 兵庫教育大学院学校教育研究科 准教授

指導 教員：水上 啓吾 都市公共政策研究分野 准教授

日時：2016年6月3日（金）午後6時30分～9時20分

場所：梅田サテライト6階107教室

議事録担当：江崎 秀子 公共政策研究分野M1

---

<講師プロフィール>

幼稚園経営の家庭に育ち、自然に幼児教育に関心を持たれる。

兵庫教育大学卒業、米国 University of Wisconsin-Madison で修士・博士号取得。

現在、保育政策の改善に向けて大活躍中。

家族：妻（美人・右脳タイプ・博士号取得専業主婦）、子ども（個性豊かな3兄弟）。

<講義内容>

1. 保育政策を考える視点
2. 保育は子どもの未来にどうつながるのか？
3. イギリスはいかにかにして ECEC (Early Childhood Education and Care) への投資を増やしたか？
4. 他国の保育カリキュラム（例）の概要
5. 思考を共有しつなげること
6. 公共政策としての幼児教育・保育を考える

1. 保育政策を考える視点（日本：保育補助金が低い）

1) 幼児教育/ 保育(ECEC)へのアクセスの問題： 待機児童の解消

保育所：待機児童問題、ex. 「保育園落ちた、日本死ね！（2016/2/15）」

幼稚園(預かり時間 14:00 まで)：定員割れ

幼稚園と保育所が一体化した「子ども園」の必要性

2) 幼児教育/ 保育(ECEC)への質の問題

・構造的な質 (Structural Quality)

ex. 建物（施設の質）、教員一人に対する子どもの数

・プロセスの質 (Process Quality)

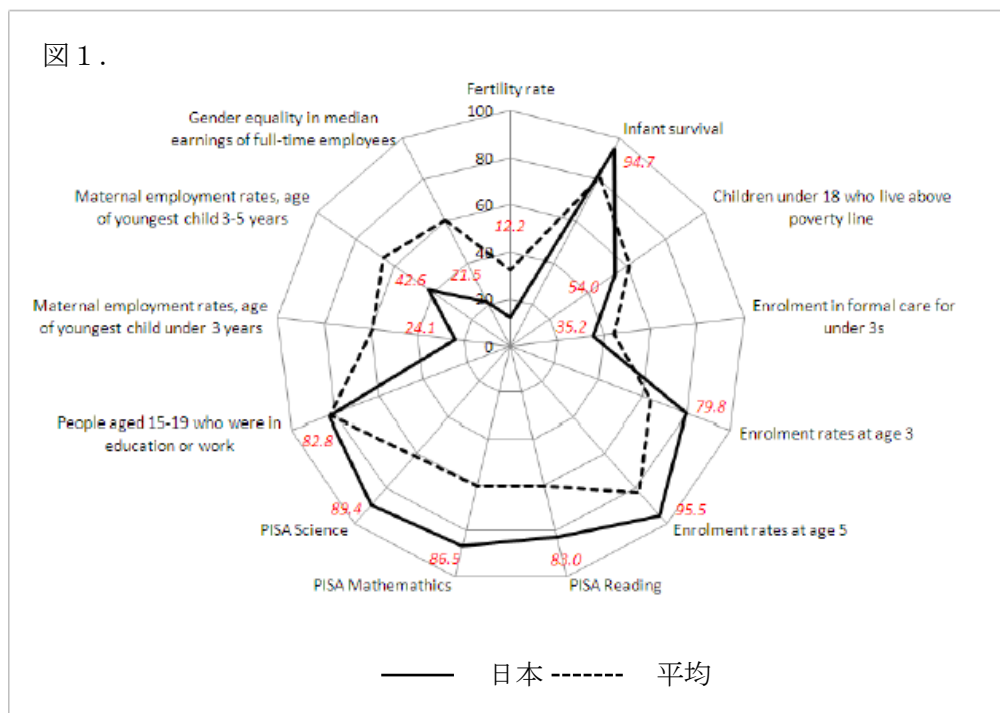
ex. 教員と子どもがどれだけ有意義に触れ合う時間を持てるか？

教員の質資格・免許は保有しているか？

免許はあっても、教員自体の中身はどうか？

### 3) OECD データ

Figure 1.1. An overview of policy outcomes for across sectors



- ・0~3歳：特定の人（親）との親密さ（attachment）が必要な時期。施設に週60時間以上あずけるのは良くないと言われている。
- ・5歳児では何らかの保育機関に入所できているが、3歳以下では入所率が低くなるというアクセスの問題がある。
- ・国際学力テストでは日本は優秀（小中学の教育はうまくいっている）
- ・結婚できないというのは、経済的な問題がある。子どもを養えないという問題がある。女性の働きやすい場所を作る。

図 2.

Figure 1.2. An overview of policy inputs

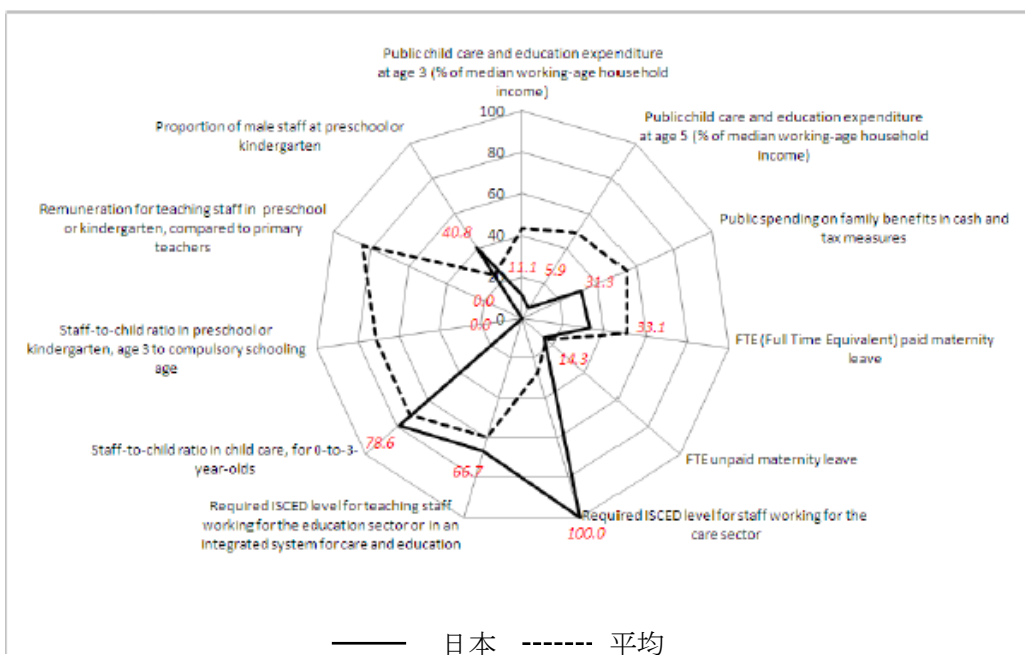
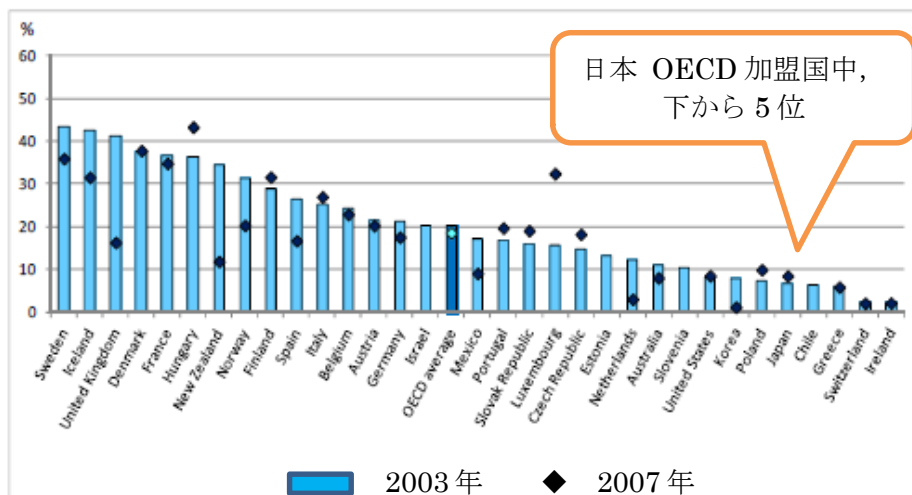


図 3

Fig. 3 3 歳児の初期教育と育児への公共支出

**Figure C.1. Public spending on early education and child care per child at age three**  
% of median working-age household income (2003 and 2007)



Source: OECD (2009), *Doing Better for Children*, OECD Publishing and OECD (2011), *Doing Better for Families*, OECD Publishing.

## 2. 保育は子どもの未来にどうつながるのか？

### 1) 幼児期に投資する理由

ジェームズ・J・ヘックマンの研究；

幼児教育に投資するとより良い効果が表れる。特に3～4歳ごろに質の良い幼児教育を受けると、やる気・協調性・集中性・持久力が付き、より良い職業につける。幼児期にIQを高める学習をさせても効果の継続は期待できない。

### 2) アメリカでの研究 (Star: Student Teams Achieving Results)

幼児教育の効果を将来的に追跡した研究：

教歴10年以上の保育者から教育されたクラス群と教歴10年未満の保育クラス群で保育の効果を比較した。

- ・ 27歳時点で前者のクラス群は後者に比べて約1104ドル年収が上回った。学級規模には関係はなく、中学2年時の成績にも影響はなかった。
- ・ しかし、中学2年時の非認知的技能（他者とうまくやっていくこと・肯定的な態度 躰けられていること）への効果が見られた。この効果が年収にも繋がり、よりよく生きる力が育まれたと結論された。

### 3) OECD 提唱のキー・コンピテンシー

#### 1. 自立的に行動する能力（主体的に生きていけるか）

2. 多様な社会グループでの人間関係形成能力（人と仲良く協力し合えるか）
3. 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（身につけたものをどう応用するか）

#### キー・コンピテンシー

知識・スキル・情動的資質（感情をコントロールする力）が「学びに向かう力」に繋がる。Well-being；安全・安心・健康に育つこと。メタコンピテンス（主要能力）。

#### 4) 学びに向かう力

- ・非認知的技能（感情のコントロール、自尊心、意欲、好奇心、粘り強さ）を育むことで学びに向かう力が培われる。
- ・アクティブ・ラーニング＝人・もの・事にかかわる力  
自分でどこまで我慢できるか、粘り強くできるかを幼児期に躰けることが大事。これはワークシートでは育たない、好きなことをやらせる時に粘り強さが出てくる。幼稚園・小中学校の学習指導要領改正：アクティブ・ラーニングを取り入れ、ヒトと主体的に関わっていくかで学ぶ力を養う。

#### 5) マシュマロ実験(Walter Mischel, 1968年)；

4歳児がある一定時間マシュマロを食べずに我慢できるか、という実験で、結果的に、食べずに我慢ができた子どもは将来的に成功を収めたていた。

#### 6) 「グリット(Grit；綴りのコンテスト)」＝粘り強さ

**Grit = Spelling Bee** で勝った人についての研究 **Angela Lee Duckworth**：

結果：勝利した人はIQには関係なく粘り強さが重要であった。

- ・本当の才能とは計画的訓練に励むことであり、粘り強さ(Grit)が成功を導く。  
熱意の継続性（飽きない）と努力の継続性（挫折しない）が重要と評価。
- \*成績よりも粘り強さが大事であり、非認知能力は幼児期に培われる。  
質の高い教育をすることで非認知能力が養われる。

### 3. イギリスはいかにして ECEC への投資を増やしたか？

#### 1) イギリスの保育政策

- ・「効果的な就学前・学校教育プロジェクト(EPPE: The Effective Provision of Pre-School Education)」の結果、全ての3~4歳児に対する幼児教育の無償化を政策として実現するに至った。  
(1日3時間、週15時間、38週、就労家庭は週30時間)

- ・EPPEによって、就学前教育が子どもの発達や学業に影響を与えることが明確になった

#### 2) イギリスの研究 (EPPE)

- ・優れた園は、子どもから主導して始まる活動が多く、優秀園と最優秀園を

比べると、最優秀園は「子どもが主導して、それを保育者が伸ばしていく」活動が多い。子どもの「考える力」を伸ばすようなかかわりをすると、小学校以降の学業成績が伸びる（教え込みではない）。

### 3) ポイント

研究の結論：保育の質が高いほど、学業成績にもつながる。

女子よりも男子の方が、教育の質の恩恵が高いことがわかった。

Cf. 図3のUKグラフ値では2003年から2007年に大幅に政策費が上昇。EPPEの研究報告を議会に提出したことが政策費の上昇に繋がった。

## 4. 他国の保育カリキュラム概要

### 4-1 テ・ファリキ（ニュージーランド；NZ）～万人が拠りどころとする織敷物～

#### 1) テ・ファリキ

- ・テ・ファリキとは幼児教育のカリキュラムの名称で、先住民の伝統工芸品の織敷物の名前を用いてカリキュラムの改善を図った。
- ・系統的カリキュラム X 「蜘蛛の巣」モデル
- ・1980~90年代は、幼児教育を市場原理で捉え①政府・財務省は、親の問題、民間企業のことと考え、②労働省は改革や大きな投資のターゲットと考えていた。

#### 2) ニュージーランドでは

- ・1986年より、保育所・幼稚園・プレイセンターは教育省が統括している。多様性・公平性・バイカルチュラリズムの価値観を導入し、保育者の養成・研修と、給与アップを政策の柱とした。
- cf. 図3. NZ参照。当事、が良く税収が上昇し、幼児教育政策費も上昇した。）

#### 3) テ・ファリキ導入の意義

- ・学校型カリキュラム（決められたスキルと知識の習得）or 発達に即したカリキュラム（身体的・知的・情緒的・社会的発達）にするかの論争に終止符が打たれた。
- ・Waikato大学のHelen MayとMargaret Carrらのカリキュラムプロジェクト（マオリ文化のカリキュラムへの統合）が発起し、子どもたちの権利を保障する「社会—文化的アプローチ」となった。

#### 4) テ・ファリキの理念

子どもたちが心身ともに健康で、ゆるぎない帰属感をもち、自分たちは社会に対して価値ある貢献ができるという知識を持ち、自信にあふれた有能な 学び手および話し手として成長するために（NZ教育省, 1996）

#### 5) ホリスティックなカリキュラム（by Carol Mutch, 2001）

「カリキュラムは伝えることはできません。それは経験されるのみです。教え手と学び手は共にこれらの経験を構築します。評価もまた、子どもの学びを複合的で事情によって異なると考える、ホリスティックなものです」

#### 6) テ・ファリキの2つの課題

- ① 財源、法規、実践義務、適切な保育者養成が必要。  
(オリジナルで新しいカリキュラムは、質の高い保育者が不可欠)
- ② 評価：学校的な知識やスキルの獲得ではなく、ホリスティックな目標を強調しているために、評価が難しい。

#### 7) 新しい評価方法としてラーニング・ストーリーを開発

- ・ケイ・トゥア・オ・テ・パエ (Kei Tua o te Pae：地平を越えて) は、子どもが携えている力が明らかになることを基にした評価アプローチを取る。
- ・このアプローチは、学びを記録するために、語り(Narrative)もしくは物語(Stories)を使う。(ロンダー, 2007)

\*評価方法：ラーニング・ストーリー

個人個人のストーリー(何を学んだか)が本にして、園内においてある。

#### 4-2 レッジョ・エミリア(イタリア)～子どもたちに耳を傾ける～

##### 1) レッジョ・エミリアの実践

- ・子どもたちの100の言葉
- ・プロジェクトを中心として、芸術的なアプローチをとる。

##### 2) 子どもたちの100の言葉

- ・イタリア レッジョ・エミリア市での実践され、ローリス・マラグッツィの哲学に基づいて行われたもの

##### 3) 人類の特性

- ・人類は(話し言葉の他に)さまざまな言葉によって自己表現する。  
Ex 絵画・音楽・身体表現 etc.
- ・どの言葉も十分に発達すべきであり、どれかが伸びると他も伸びる。

#### 5. 思考を共有しつなげること

##### 1) 参考書

Iram Siraj, Denise Kingston & Edward Melhuish, 秋田 喜代美&淀川 裕美(訳):  
「保育プロセスの質」評価スケール——乳幼児期の「ともに考え、深めつづけること」と「情緒的な安定・安心」を捉えるために, 明石書店, 東京, 2016

##### 2) 思考を共有し、つなげること

- ・‘sustained shared thinking’  
二人もしくは二人以上が、知的な方法で“一緒に”取り組み、問題を解決

し、あるいは概念について明らかにし、自分たちの活動を捉え直し、語りを広げたりすること。どの参加者も、ともに思考することに貢献し、思考を発展させたり広げたりすることが求められる。

・「就学前教育の効果的な実践(EPPE)」研究から出た「効果的な幼児教育法調査(REPEY)」のデータから導かれた結論。

① 短い会話でも良い、一緒に考えることに参加し貢献することが大切

② 大人は、「一歩下がって」感性豊かに子どもたちの探求・問題解決を支える。

### 3) SSTEW (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being)

・「思考を共有し、つなげること」と「情動的な安定・安心」

・施設型保育の実践を観察するためのスケール。

### 4) 学びと批判的思考を支える (1~7 段階のスケール)

・子どもたちが探求したり、調べたりするための支えがほとんどなされていない

・科学や算数、問題解決、あるいは概念について、保育者がほとんど理解を示していない

・子どもたちの探求を促すための活動や、用途の限られていない資源を配置している

・子どもたちの探求や調査について、子どもたちと一緒に話し合っている

・子どもたちが、観察したことと、それ以前の経験やこれからのフォローアップ活動とをつなげられるよう、支えている

そのために、(本やパソコンにある)写真や他の資源を利用している

・子どもたちが想像力や創造性を使って、探求し実践するように支えている  
子どもたちが資源や科学に用いる道具を持って、ある場所から別の場所へ移動することを促している

・探求、わくわくする気持ち、驚きや不思議に思う気持ちをモデルにして示し、子どもたちがそれを観察してから活動に参加できるようにしている

・子どもたちの行為や興味が生じた時に、それらについて指摘し、共有し、説明している シンプルな科学的概念、説明的概念を紹介している

・子どもたちが観察する際、科学的な方法や問題解決の方法を用いることができるよう、見本を示している

子どもたちと話し、行動する中で、丁寧に観察すること、予想を立てること、表現すること、評価することを支えている

・子どもたちの経験から出てくる身近な言葉に加えて、それらの経験につながる、科学的な言葉(例えば「溶ける」)を使っている

・子どもたちの科学的活動、問題解決の活動、探求に参加するよう、保護者に話し、促している

## 6. 公共政策としての幼児教育・保育を考える

### 1) 日本が生き返るために

- ・子どもの将来を見据えて、どのような政策を打つことが必要か？  
就学前に質の良い環境で情緒を整える必要がある。
- ・政策によって、どのような効果をもたらされるのか？  
保育者が短期で辞めるような安定しない保育所で育った子どもは、情緒の安定しない状態で育つ。それに対して、保育者が長く勤められ、子どもたちのために話し合いを持ち、地域も良い子どもを育てようとするようなところで育った子どもたちは質のよい教育を受けられる。結局、財政の豊かな環境で育った子どもたちは質のよい子どもに成長し、年収も増えるということになる。政策の方向性が鍵になる。
- ・エビデンスベース(evidence base)の政策決定  
\*研究者が **evidence data** を作成し、それを **evidence base** として政策に活かすことが必要であるが、現状では研究者の努力と財政の努力が足りていない。
- ・「哲学」のある政策とは  
\*何を見て、何を勉強して、何を願っていか。それには、質を問う政策が必要となる。

### 2) 質を問う政策

- ・「量」ではなく「質」を問う政策が必要  
Ex. 保育者が短期で辞めるような安定しない保育所で育った子どもと長期働けるような保育所で育った子どもの成長を長期追跡比較し、財力のあるところに質の良い教育ができるという **evidence data** が必要。
- ・「目に見える」ものではなく、「目に見えないもの」を追い求める  
研究者と政策決定者は同様に「質」を求め、本質を見通す目を持つことが必要である。
- ・成熟した社会、成熟した市民  
政策を行う人、実際に保育を行う人、地域の人も共通した認識を持っておくことが必要である。 そうするには、保育現場でのリーダーシップ、地域でのリーダーシップをとるのが重要で、それらは政策の決定に委ねられる。

### <主な質疑応答>

質問 1. 講義では **evidence base** が大事だと説明されていたが、日本の場合は **evidence base** がないので **data** を評価することができない。何か課題を持たれているか？



返答：我々研究者は evidence 結果を出して政策に役立っていることを示す必要がある。現在、幼児教育政策センターが2つ設立されている。東大と、文科省（国立教育政策研究所）の中に設立されているが予算が少ない。研究費は欧米では10億単位であるが、日本では科研費2千万円とるのもやっとならぬと欧米との差が大き過ぎる。研究は既成的な政策決定をしないと難しい。研究者と政策決定者が「これは大事ですよ」と、市民に理解を求めなければならない。長期的な結果を見据えての研究が必要。OECDの結果は1つのきっかけに過ぎない。（鈴木先生は）北欧、デンマークあたりの意見を参考に取り入れて「非認知」と「認知」の領域を同時に研究中である。

質問2. 学びの継続が重要であるとのことだが、幼児から青年までのギャップが大き過ぎる、リンクしているのか？

返答：育てようとする力が、幼児教育から高等教育を1本の線として繋がるのが大事で認知能力・非認知能力を育てるのも大事。今、指導要綱の改定の柱がそれになっていて、内容、方法、評価の一体化が言われていて、評価のところをどうするかが難しく、幼児期の方から少しずつ上に上げていきたいと思っている。大学入試が思考力中心に変わっていくので、そのうちに内容が変わって行く。「実際に調べて、書いて、出す、ということ」を幼児期から慣れていたら、小学校、中学校とそれでやって行き、高校ではしっかり書けるかなという感じである。

質問3 少子化とともに、多民族性の社会が出てくる場合、どうなるか？

返答：多文化共生をどうするか？という質問であるが、まだ国として移民政策が定まっていないので多文化共生の問題は現在のところは教育学的には必要とされていない。まずは、移民政策の決定が先で、共生の問題は将来的には必要になってくると思われる。

他